2026年3月10日「秋田魁新報」掲載（「秋田遠景近景」日本銀行秋田支店長コラム）

秋田遠景近景

日銀秋田支店長コラム

雪との共生

過酷な暮らし、恩恵も多大

ミラノ・コルティナでは五輪からパラリンピックに舞台が移り変わっている。日本人選手の活躍もさることながら、気になったのはイタリアでも温暖化が進んで多くのスキー場が閉鎖され、今回の五輪でも一部の会場では人工雪が使われていたという報道だ。

もう10年以上前にお隣、韓国の平昌を訪れた際、当時ソチと誘致を激しく争っていたこともあり、出張にもかかわらず現地の方々にアピールを兼ねた歓待を受けた。ただ、平昌も積雪は年々減っているとの説明を受け、ゲレンデには人工降雪機で雪がまかれていたのを思い出す。国際オリンピック委員会（IOC）も、このまま気候変動が続けば冬季五輪が開催できる都市は極めて限られると危機感を抱いているようだ。

自分自身、これまで住んだ最も高緯度の都市はロンドンながら、暖流の北大西洋海流のおかげで冬日が続くようなことはまれで、雪すら珍しい土地であった。そのため、冷温帯に属するこの秋田での冬が初めて本格的な雪を伴う生活となる。

11月中旬にこの冬初の降雪を観察した時には、クマの冬眠を後押しする天の恵みと思えたものの、少したつとその大変さを実感するようになった。多くの除雪機を運用し、除去された雪を処理場へ運搬するだけでもコストがかさむのに、天候次第で何度も繰り返さないと日常生活に支障を来すなんて、雪国の暮らしはどれほど過酷なのだと感じたものだ。

自治体経費に占める除排雪費もばかにならない。先月取り上げた新スタジアムの建設費用が150億～200億円とされる中、県の2025年度の道路除雪費用は年間87億円を見込むという。極論すれば、2、3年ほど雪の降らない冬が続けば、それだけでスタジアム建設費が賄えるほどの規模だ。

個人の生活を顧みても、暖房費はたいてい冷房費よりかさむし、冬季の運転にはスタッドレスタイヤへの交換が必須だ。危険だと分かっていても、水を多く含む重い雪が積もれば、建物倒壊の恐れもあり、雪かきも定期的にせざるを得ない。

交通インフラへの被害に加え、今冬は除雪に関わる痛ましい事故も相次ぎ、本県を含むいくつかの県では災害救助法を申請するほどの事態となった。雪のある北国での生活が、社会的にも経済的にも大変な重荷となることを実感している。

とはいえ、雪なくしては本県の冬の魅力も減じてしまう。2月中旬、県内各地で集中的に行われた小正月行事に精力的に出かけてみた。湯沢の犬っこまつりでの彫像や横手の多様なかまくらに目を奪われたが、こうした作品は、それこそ雪がなくては成り立たない。

刈和野の大綱引きや六郷のカマクラ、男鹿のなまはげ柴灯（せど）まつりといったそれぞれの土地の伝統に根差した素晴らしい祭りも、次の収穫や無病息災を祈る冬ならではの行事であり、雪を遠景とすることでより一層幻想的な印象をもたらしていた。

農業県である本県にとって雪解け水による豊富な用水は稲作の必須要件だ。その点では、県南の方から、この冬の累積降雪量は500センチほどで、十分な量と言えるか不安だとの声も聞かれた。

日本酒を醸す秋田流の長期低温発酵も、厳しい冬と雪がもたらした珠玉の技術と言えよう。森吉山の樹氷や各地のスキー場は雪なくしては存在できず、台湾をはじめとしたインバウンド（訪日客）の観光客が求める風景は雪と共にあるのは間違いない。観光やレジャー需要を通じて本県経済にもたらす恩恵も計り知れず、かように雪の評価は難しい。

秋田の冬に雪はつきもの。全世界的に気候変動が進む中、異常気象の一環として短時間に大雪の降る確度は高まっている、との専門家の指摘もある中で、なんとかバランスよく適度に降ってほしいと都合のいいことを願ってしまう。

なお、刈和野の大綱引きと六郷のカマクラの竹うち、いずれの勝負でも米価上昇につながる町内の勝利で、仕事柄天を仰いだのは内緒だ。本年は物価上昇も緩やかとなってほしいと望んでいる。

（種村知樹・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉